

カント文献紹介

前号に引き続き、編集部による自由企画枠として今回はカントに関する最近5年間の雑誌論文の中から主なものを選んで紹介する。

Ameriks, Karl : Hegel's Critique Of Kant's Theoretical Philosophy, *Philosophy and Phenomenological Research* 46 (1985), 1-36.

カントの理論哲学の中心的な構成要素、即ち、カテゴリーの超越論的演繹と超越論的観念論の立場に対するヘーゲルの取り扱いを考察している。演繹に関しては、「自我」の扱い、知識の必然性の説明、認識自身による認識能力の限界設定というカントの三つの考えが論じられる。それらについてのヘーゲルの批判は、彼独自の自我の概念から絶対的観念論を導き出そうとする立場よりなされているが、それは、カントの議論を理解しておらず、不充分とされる。超越論的観念論の立場に関してもヘーゲルは、彼の絶対的観念論からカントの制限テーゼ、つまり、我々の認識はア・プリオリな構造を持つが、現象的であるという立場を拒否し、物自体、アンチノミー、誤謬推理に対し批判を行なうが、これらの批判は、混乱し、問題を見逃しているものであるとされる。論者は、ヘーゲルの批判が全体的に、相互に密接に結び付いた誤りであるが故に、失敗であると考えている。

(樋口善郎)

Aquila, Richard E. : Intentional Objects And Kantian Appearances, *Philosophical Topics* 12 (1981), 9-38.

カントのいう「対象」はある意味で純粹に志向的 (intentional) な対象であり、この点で彼の認識論はブレンターノのその先駆となっている、と論ずる一編。

無論カントの認識論の解釈は様々である。〈感覚意識の対象はそれ自体としては現象にすぎない〉というカントのテーゼには、senseōdatum approach や double-aspect approach 等々種々の解釈法が存在する。しかし論者は、それら一々を吟味した上で、テーゼでのべられる「現象」を志向的对象と見る立場に定位する。さらに、対象への方向性 (directedness) が直観の記述的性質の一つであることが確認され、直観対象の存在に関する一種の現象主義がカントの議論の中に認められる。論文の末尾では、客観的对象と現象学的対象とをカントが混同したことが示唆されるが、論者によればそれも知覚の志向性に関するカントの洞察に由来することなのである。

(松田克進)

Baldacchino, Lewis : Strawson On The Antinomy, *Mind* 93 (1984), 91-97.

ストローソンが行ったカントのアンチノミー論に対する批判、即ち、①カントの議論は循環している、②第三、第四アンチノミーの解決にあたって、カントは超越論的観念論の可能性に訴えるが、その議論は、一般因果律と両立しない、に対する反論。

アンチノミー論は一般に、超越論的観念論の矛盾命題を前提しており、また第一アンチノミーは循環論法にならないという解釈が可能であるが故に、①は否定される。

②に関しては、カントの主張する一般因果律は、表象間の無制限な因果律の適用を主張しているのに対して、第三、第四アンチノミーの反定立は、絶対的に無制限な因果律の適用を主張しているが故に、一般因果律から反定立の真であることを導き出すことはできず、従って、ストローソンの批判は成立しないことが示される。

最後に、第三、第四アンチノミーの生じてくるカントの根本的な前提が示される。(染田 靖)

Boboc, Alexandru : Kants Kritizismus Und Die Neue Bedeutung Der Metaphysik, *Kantstudien* 74 (1983), 314-326.

論者は、近代の主要な傾向である批判主義がカントに於いて際立って現われたと言う。論者の主張は次のようなものである。カントの問題は、形而上学を批判的に根拠付けることであるが、その根拠付けは、従来の哲学者達と違った新しい方法を要求する。その方法とは、批判的超越論的方法である。それは、経験との連関のなかでア・プリオリなものを可能にする条件を問うことである。この方法を通して現われてくるのは、超越論的観念論の立場である。つまり、理性がそのア・プリオリな原理を通して経験のなかで認識されるものしか教えないとする立場である。この立場を軸として新しい批判的形而上学が構想される。この形而上学は、自然の形而上学と人倫の形而上学に分かれる。そこで、批判主義はカントに於いて思惟や自然、社会的世界の普遍妥当な原理についての学として現われてくることになるのである。(樋口善郎)

Bröcker, Walter : Kants Beweis Des Kausalgesetzes, *Kantstudien* 78 (1987), 314-317.

因果律は経験の可能的制約であるが因果律の証明根拠をなすものは可能的経験である。この循環を論者は、自由と道徳法則との間の「存在根拠—認識根拠」という関係、これとの類比によって理解する。重要なのは自由の認識根拠たる道徳法則が「理性の事実」と呼ばれているのに対応して、因果律の認識根拠たる経験

の可能性が「全く偶然的なもの」と呼ばれていることである。しかるに経験の可能性は、三段論法による因果律の証明の小前提をなすものとして因果律の証明根拠なのであるから、これが証明され得ないとなれば因果律は仮説ということになる。しかし論者は経験を徹底して偶然的なもののみとしたフッサールを引用しつつ、当の小前提の立証不可能性を更に強調した上で、因果律を積極的に仮説とみるべきことを主張する。それは、我々が生きていく上で受け入れざるを得ない仮説なのである。 (松尾宣昭)

Dilman, İlham : Reason, Passion And The Will, *Philosophy* 59 (1984), 185-204.

理性は把握し計量する能力であって、情念が掌る意志の活動には直接の影響を及ぼし得ない、とするヒュームに対し、カントは情念への従属を一つの可能性として認めつつも、理性への適合による意志の自律の可能性をまた一方に立てた。しかしその際に、理性と情念とが相互に排しあう範疇であるとするヒュームの二分法をそのまま継承したため、カントが意志の自律に与えた規定に完全に従うことは、純粋な道徳的関心によって行動することとさえ相容れなくなってしまった。

フロイトは、自我のイドや超自我に対する関係を論じて、そこには排除や隷属という外的な関係の他に、自我とそれら外なるものとの統合による内的関係もあることを示した。自我を理性、イドを情念に対応するものと見なし得るならば、ヒュームやカントが想到し得なかった第三の道、相対的自律がここに提示されていると言うことが出来よう。 (村上俊一)

Doore, Gary : Contradiction In The Will, *Kantstudien* 76 (1985), 138-151.

カントの定言命法は行為の結果や目的に無関係に普遍妥当性を要求するため、具体的内容をもつ命令としては言い表されない。そこで論者は、カントに従ってすべての人の行為の格率が普遍的法則として妥当するような世界を思考実験により想定し、概念においては矛盾のない行為でもそうした世界の中では「意志することの不可能な行為」すなわちその行為を意志することで自己矛盾に陥る行為があるというカントの考えを、①全ての道徳的行為者は目的を持つ、②目的を意志するものはだれもその目的に十分な手段を意志する、というア・プリオリな前提から証明しようとする。そしてその前提と矛盾しない行為こそ道徳的に正しい義務であると主張し、例えば嘘の約束をしないこと等をあげる。さらに先のア・プリオリな前提に「道徳的行為者は自分の目的の最も達成されそうな状況を意志する」という前提を加えて、功利主義の原理がカント倫理学から導出されることを示し、後者こそより包括的な倫理学的原理であるとする。 (山本興志隆)

Drescher, Wilhelmine : Die Ethische Bedeutung Des Schönen Bei Kant, *Zeitschrift für philosophische Forschung* 27 (1975), 445-450.

理念に適合した個別的存在者の表象を理想と呼ぶが、美の理想が求められるのは、人間の形象に関してのみである。人間だけが、存在の目的を自らのうちに持つからである。かかる目的の表出である人間の美の理想は、多数の人間の形象の平均による標準的理念ではなく、道徳の表出において成立する。道徳的理念を内面からの身体的表出としていわば可視的なものとするためには、理性の純粋な理念と構想力の偉大な力量とが、一人の芸術家において結合していなければならない。このようなカントの思想の実現を、シラーのテルヤゲーテのイフィゲーニエに見ることが出来る。ここでは美は、道徳の象徴として経験と理想とを仲介し、感性的なものから道徳的なものへの無理のない移行を可能にしている。論者は、これが現代に再興されるべき芸術本来の使命である、と主張する。(村上俊一)

Faggiotto, Pietro : Notes Pour Une Recherche Sur La Métaphysique Kantienne De L'Analogie, *Revue Thomiste* 87 (1987), 85-92.

カントは、可能的経験の限界を超えて因果性のカテゴリーを使用することを厳禁しながら、経験を超越する可想的実在を感性的触発の原因として認めた。ここには、明白な矛盾があるように見えるが、論者はカントの思索の根底を支える暗々裡の前提を発見することによって、この矛盾を払拭しようと試みる。論者によれば、この前提は二つある。(1)悟性の普遍的価値を顧みた場合、因果性のカテゴリーは単に現象の対象を秩序づけるためにのみ使用されるのではなく、可想的実在を推論するためにも使用され得る(いわゆる認識と思惟との区別)。但し、それには非現象的对象が必要になる。(2)「私」が自分自身について持つ意識(認識ではなく思惟)が、この非現象的对象である。カントは、この二つの前提から無条件者を推論する。尤も、その推論は無条件者そのものの認識(仮象)ではなく、「類比」による、その無条件者と我々や世界との関係の認識である。現象界という限界を規定することは、現象界とその限界を超えるものとの関係を規定することでもある。(武藤整司)

Flach, Werner : Zu Kants Lehre Von Der Symbolischen Darstellung, *Kantstudien* 73 (1982), 452-462.

論者はカントの美学は彼の哲学の体系の要としてのみ考察され、それが含む理論の現実性については軽視されてきたとする。そして、象徴的表現(die symbolische Darstellung)の理論を取り上げ、それが文学理論の基礎付けとなりうることを示す。カントによれば、理念を直接直観することは不可能であるが、象徴的表現においては類比を介して間接的ながら感性化する。しかも、論者の解釈に

よれば、この象徴的表現は言語において遂行される。かくして、①文学理論は言語のこのような象徴的側面を扱う。②文学理論における解釈とは象徴を可能にしている類比関係の探求である、③象徴的表現の場が言語であるため、詩的芸術は優位を占め、かつ、他の芸術もまた言語にかかわる、と結論づける。しかしながら、紹介者の意見では、言語の自律性が自覚されている現在において、文学を象徴の側面からのみ規定することには問題があると思われる。(森 秀樹)

Flynn, James R. : The Logic Of Kant's Derivation Of Freedom From Reason
—An Alternative Reading To Paton, *Kantstudien* 77 (1986), 441-446.

ペイトンによればカントは定言命法の第四の定式において論理的な問題に直面している。カントは実践理性と定言命法との間の関係をア・プリオリな総合として把握し、このふたつの概念を結ぶ第三の概念として自由の概念を提出しているが、その際実践理性と自由の間の関係が再びア・プリオリな総合であるとされているため、それらを結ぶ概念が必要となる、といった論理的な背進に落ちているというのである。著者はこのようなペイトンの批判に対し、実践理性と自由との間の関係は、なるほど論理的にはア・プリオリな総合判断であるが、認識論的に見れば、実践理性の使用が必然的に自由を前提とする、という関係が成り立っており、ペイトンの言うような困難は生じないと主張する。また、この実践理性との自由の関係がデカルトのコギトの証明と同じ認識論的構造をもつ、という指摘も興味深い。(山脇雅夫)

Friedman, R. Z. : Hypocrisy And The Highest Good—Hegel On Kant's Transition From Morality To Religion, *Journal of the History of Ideas* 24 (1986), 503-522.

論者は『精神現象学』の「道徳的世界観」で展開されているヘーゲルのカント批判を順に吟味し、その批判が、カントの諸要請を目的と見なすという点に立脚していることを指摘する。こうした見方の背後に、カント並びに諸々の哲学的立場を絶対者への階梯として理解するヘーゲルの目的論的立場を見出しつつ、要請はむしろ道徳的経験の可能性の条件として理解されねばならないとする。信じられねばならないが真だと認識されてはいない宗教的要素としての諸要請は、世界観に矛盾、ずらかし、偽善をもたらさざるを得ないという批判をも、ヘーゲルの立場からなされたに過ぎないものとして退け、それらの宗教的要素がカントの道徳論の形成に大きな役割を果たしているという事実は、むしろ人間の理性と悟性の限界の内に留まって信じねばならないこと存在を認める、カントの立場の知的謙虚さを表すものであると評価し、カント独自の立場を擁護している。

(竹島尚仁)

Funke, Gerhard : Gottfried Martins Kant—Der Mensch Als Schöpfer Der Erscheinungen, *Kantstudien* 78 (1987), 261-278.

フンケは存在論的なカント解釈にもとづくマルチンの形而上学を紹介している。それは、開かれた全体性において諸哲学を統一するアポリア的弁証法である。それは、究極の原理をもたず、問題化のみを原理とし歴史的に形而上学を受け継がれてきた問いを繰り返し深化する。このアポリア的弁証法をささえているのは「現象の創造者としての人間」という、人間と存在の関わりである。人間は歴史的に進展する諸形而上学へと自己を展開し、矛盾する形而上学の未解決のまま開かれた全体の中で自己を再び見つけるとき、この人間は基盤を自己の内に見いだすのである。ただこの開かれてあること、究極をもたぬことは人間が物自体の創造者でなく、現象の創造者にすぎぬこと、純粋な自発性でなく、ただ類比によりそれに近づくことによる。しかし、人間はその現存在にかんして被造物だが、行為にかんして現象の原因なのである。このことを積極的原理とすることに普遍的形而上学は成立する。(安江将史)

Gilead, Amihud : The Relationship Between Formal And Transcendental-Metaphysical Logic According To Kant, *Monist* (1982), 437-443.

形式論理学と超越論的論理学を巡るこれまでの議論の多くは、両者のいずれかに対する他方の先行性を示そうとするものだった。論者はこの見解を採らず、同じ悟性の異なる使用乃至は適用として両者を説明する。このこと自身はカントも言っていることであるがカントは判断表からカテゴリーを演繹しているために、一見形式論理学の先行性が暗示されている感を与える。だが論者によれば判断表はカテゴリーを演繹乃至は正当化するものではありえず、その発見の手引きにすぎない。更に発見の手引としてであれば判断表もカテゴリー表も等価的なのである。にも拘らず専ら前者が後者の手がかりとされたのは歴史的事情による。つまり第一批判は科学的形而上学を構築する意図を持っていたが、そのためには既に与えられているア・プリオリな科学の成果を利用せねばならなかった。判断表を与える形式的論理学はこの成果の一つとして利用された、と論者はみるわけである。(松尾宣昭)

Heckmann, Heinz-Dieter : Kant Und Die Ich-Metaphysik—Metakritische Überlegungen Zum Paralogismen-Kapitel Der Kritik Der Reinen Vernunft, *Kantstudien* 76 (1985), 385-404.

論者は「自我—形而上学 (Ich-Metaphysik=IM)」を、心の形而上学 (Seelenmetaphysik) の基礎づけと正当化を行うことのできる哲学的立場として位置づける。そこで、IM の体系的に可能な概念から出発して、これらの諸概念に対す

るカントの異論すなわち純粹理性批判のなかの著名な「純粹理性の誤謬推理について」等の箇所にもみられる異論を再構成し吟味することが本論文の目的とされる。特に IM の体系のなかの意識実体の命題、意識統一の命題、意識同一性の命題についてのカントの異論が検討され、最終的にはそうしたカントの異論は正当なものとして承認されうるものではないと結論される。つまり、カントが IM の命題によっては自我の実在性は証明されないとするのに対して、論者は私の内的経験において私自身 (Ich selbst) が与えられる、すなわち私自身という概念に対応する対象が与えられるからには、IM の自我概念 (Ich-begriff) は客観的実在性をもつのだと主張する。(山本與志隆)

Hintikka, Jaakko : Kant's Theory Of Mathematics Revisited, *Philosophical Topics* 12 (1981),201-216.

カントは数学的方法の要点は作図 (construction) の使用にあるとし、数学的真理の分析的要素を推論に、総合的要求を作図 (一般的概念を例示するために直観を導入すること) に位置付けた、ということ論者は示そうとする。①カントにおいて直観は個別的表象にすぎず、それ自身は総合的真理の源泉ではない。②カントはユークリッドの方法を受け継いで、構成の手續きと推論の手續きを区別している。③カントが推論は分析的であるとしていることに基づいて、カッシーラーは「論証の一部ではなく公理の性質が数学的真理を総合的にする。」と解釈するが、この解釈は推論と (構成に基づく) 真理の区別を無視したものである。④そして実際、カントのテキストの整合的解釈から、ア・プリオリな総合判断における諸概念の必然的な結合は作図の使用によって見られうるようになるといえるのである。(森 秀樹)

Höffe Otfried : Is Rawls' Theory Of Justice Really Kantian?, *Ratio* 26 (1984), 103-124.

ロールズの正義論は、功利主義に対抗するものであり、ロールズ自身そうしているように、カントの道徳論と軌を一にするものと考え得る。この見解の当否を吟味するために、論者は正義論を、(1)「思慮深い選択」に基づく実用的でア・ポストエリオリな議論であって、反カント的ではないか、(2)単に法論的であって倫理学的ではなく、ただ部分的にカント的と言い得るのみではないか、の二点に渡って検討する。(1)については、「無知のヴェール (Veil of ignorance)」の概念を前提とする限り、正義の原理の選択は、経験的条件から独立した、カントのいう理性的＝道徳的選択であるとし、(2)については、正義の原理は、倫理学と法論に分化する以前の道徳性の理論が、法的・政治的な領域に適用されたものに他ならず、カント的と見なされ得るとした。にもかかわらず、それぞれ、ロールズ独自の概

念が反カント的な要素として入り込んでおり、「正義論はカント的である」という主張を弱めていると結論する。
(寺田俊郎)

Johnson, Mark : Imagination In Moral Judgment, *Philosophy and Phenomenological Research* 46 (1985), 265-280.

道徳判断において、抽象的形式的な定言命法を具体的個別的ケースへ適用するためには、カント自身は示唆にとどめている想像的メタファー的な過程が必要であるということが次の諸点に関して論じられている。まず、現今の具体的状況に如何なる一般の規則が関与するかの認識のために、1、状況の多様な細部を組織化し、そこから重要なものを選別し、2、当面の状況と、かつて或る規則が適用された状況との類似性相違性を考量しなければならない。更に、関与する一般的な道徳の規則が具体的状況に適用されるためには、3、自然の体系を道徳の領域を理解するために利用するといったメタファー的過程が必要であり、しかも、4、メタファー的に理解された道徳観念は現今の特殊状況に合わせてその都度新たに裁断され直されねばならない。以上のような過程は理性、悟性と分かち難く連関する構想力の働きであると、論者は主張する。
(吉本浩和)

Kaulbach, Friedrich : Kants Auffassung Von Der Wissenschaftlichkeit Der Philosophie—Die Sinnwahrheit, *Kantstudien* 76 (1985), 1-13.

論者は、カントのいう哲学の知を、認識主観が世界に対してとる立場に応じて選択されるパースペクティブに関係するものとして規定する。哲学固有の課題は、主観の選択するパースペクティブが、主観の立場・関心に相応しいものであるかどうかを判定することにある。パースペクティブが主観の立場・関心に相応しいことが、哲学的な意味での真理である。論者は、これを、対象認識の真理と区別して「意味真理 (Sinnwahrheit)」と名付ける。例えば、関心が経験の可能性にあれば機械的自然のパースペクティブが、自然の体系的統一にあれば合目的的自然のパースペクティブが意味真理をもつ。このような哲学の知の確実性は客観的なものではなく、信念に基づく主観的なものである。信念に基づく知は、特に行為の世界のパースペクティブの中で、行為の意味が必然的に求められるまさにその必然性によって確実性を与えられる。こうして、哲学は独自の「学としての性格 (Wissenschaftlichkeit)」を自ら与えるのである。
(寺田俊郎)

Kekes, John : Moral Sensitivity, *Philosophy* 59 (1984), 3-19.

論者は現代の哲学者の多くは「道徳の中心課題は〈何をなすべきか〉である」というカントの見解を受け入れているという。これに対し〈どのような人間であるべきか〉が論者の道徳哲学の課題である。つまり個人は行動を選択する前にす

でにある道徳的状況におかれているのだから、この状況を正確に把握しそこでの道徳の可能性を吟味しうる人間になることが重要となるのである。このような能力を論者は〈道徳的感受性〉と呼ぶ。これがある事柄を把握する時には、道徳的語句 (moral-idiom) が用いられる (正直な、卑怯な等)。その意味は慣習的道徳によっては形式的にしか示されないが、反省の働きによって状況にふさわしく確定される。反省は道徳的語句の使用に際して〈呼吸〉 (breath) と〈深み〉 (depth) とを与える。論者の用語は比喩的でわかりにくい、前者は道徳的語句の様々な含意の弁別を指し、後者は実際の自分より高い立場から状況を見ることのできる想像力を指す。

(石田あゆみ)

Kitcher, Philip : How Kant Almost Wrote “Two Dogmas Of Empiricism”,
Philosophical Topics 12 (1981), 217-250.

カントは、クワインの「経験論の二つのドグマ」において表明された考えと部分的に相通ずる考えに至っていた、と想定することによって、第一批判の序文において表明されているカントの意図と分析論の連関、及びカントの数学についての考えを解釈する試み。

ア・プリオリな判断は、①経験から独立であるが故に経験によって反証されることがないだけでなく、②その中に含まれているア・プリオリな概念が、経験に適用できなくなり捨てられるという可能性もあってはならない。カントが、ア・プリオリ性を分析性とは独立に考察するのは、判断が分析的であってもこの二つの条件を満たすことはできないと考えたからである。この点において、論者の解釈したクワインの考え、即ち、たとえ分析的真理が存在するとしてもそれらはこの二つの条件を満たすことができないという考えと、カントの考えが一致していると主張する。

(染田 靖)

Kolb, Daniel C. : Thought And Intuition In Kant's Critical System, *Journal of History of Philosophy* 24 (1986), 223-241.

カントの思惟と直観との区別は、(1)経験においてこの区別は意味を持たない。(2)区別が判然としないので、その後続くカテゴリーの演繹が理解不能なものとなる、という二通りの仕方ですべて批判的になっている。カントはこれに答えて、(1)対象の概念的表象 (一般的、間接的) にはない特質が直観 (個別的、直接的) には常にある (現象学的説明)。(2)我々の知性は直観的ではなく、従って、対象と関係を持つためには概念的な能力とは区別された直観の能力が必要である (超越論的説明)、と主張する。論者は、前者の主張に関しては、詳細な検討を加えた後で、これを難あり (判断において直観と概念とがその役割を異にすることが認められたとしても、なお両者を区別するには不十分) と結論する。後者の主張

に関しては、人間知性の特質を鑑みて（人間知性は有限であり、知性的直観のあらゆる能力を欠いている）、我々のあらゆる経験に共通な根本的事実に対する反省が、我々を思惟と直観との区別へ導くのであると結論し、カントを擁護している。（武藤整司）

Krings, Hermann : Natur Und Freiheit—Zwei Konkurrierende Traditionen, *Zeitschrift für philosophische Forschung* 39 (1985), 3–20.

自然科学と自由が勝利を謳歌した近代の輝かしい光（enlightenment）は今や薄れ、新しい時代の模索が「ポストモダン」の名のもとで既に進められている。モデルネの批判は、近代の二つの伝統である、自然科学的思惟と自由についての近代的な思惟との間の矛盾を顕にただけでなく、それぞれの内部における、自然科学の伝統と技術やテクノクラシーとの間の矛盾、および自由についての近代的思惟の伝統と他律（Fremdbestimmtheit）や支配との間の矛盾をも浮き彫りにした。近代ヨーロッパ文化に根差す、こうした自然と自由の矛盾・対立のもとで人々は、科学・技術的文化と個人的および政治的自由とのいずれにも関与しており、一種の精神分裂状態（Schizo-Phrenie）にある。論者はこの論文において、自然と自由の関係を巡るカント、ヘーゲル、フィヒテ、ジェリングの思索のスケッチを行なって、分裂・対立が生じた原理的根拠と問題解決のための端緒を探った後、分裂克服を阻害している三つの点を指摘する。（田中茂樹）

Kuehn, Manfred : Kant's Transcendental Deduction Of God's Existence As A Postulate Of Pure Practical Reason, *Kantstudien* 76 (1985), 152–169.

カントが神の存在に関する道徳的議論において成し遂げたことは実際にはなんだったのか、ということは今なお問題である。彼が神の存在の客観的論証を試みたのだ、とする伝統的解釈のほかにも、単に主観的で個人的な信仰を正当化するものである、とする近代的解釈もある。論者は、その双方を一面的であるとして退け、問題解決の糸口をカントの意味の理論に求める。カントによれば、語が有意味であるためには経験中にそれに相当する対象をもたねばならない。勿論神という概念に相当する「特定の対象」が直観によって与えられることはできないから、そのかぎりでは近代的解釈は正しいが、「対象一般」としてそれを考えることはできるし、それどころか道徳法則との関連からすれば考えられねばならないのである。カントは神の概念の可能的対象を考えることの可能性と必然性を示しているのだ、とされる。（山脇雅夫）

Lenders, Winfried : Der Allgemeine Kantindex—Vom Stellenindex Zum Informationssystem, *Kantstudien* 73 (1982), 440–451.

アカデミー版のカント全集の諸巻に対して適切な索引を作ることが70年代より G. Martin 等によって企てられてきた。これは「一般カント索引 (=AK)」と呼ばれているが、諸々の問題によりその公刊が未だ果されていない。本論文は、(1) AK 作成のための素材は、目下いかなる状態にあるのか、(2)いかなる展望が、根本的計画の意味で今後の諸研究に存在するのか、また(3) AK の素材は辞書の索引の目的を越えていかに評価されるのか、を報告するものである。現在素材として全集の19巻分がコンピューターに入力されており、これを元にして AK を構成するのが目標である。さらにこれらの素材の応用の一例として、時間的順序の確定している著作にコンピューター情報処理、統計学的方法を適用することで、時間的順序がまだ確定していない、遺稿などの順序を決定する可能性が報告されている。(黄 徹)

Lütke, Rudolf : Kants Lehre Von Ästhetischen Ideen, *Kantstudien* 75 (1984), 65-73.

論者は、全批判哲学に於ける第三批判の核心的位置を美的理念について解明しようとする。まず、論者の指摘によれば、第三批判内において、天才による美の産出に連関する美的理念についての説は、趣味に主導される美的判断の妥当性を論ずる受容美学的な問題設定とは異質である。次に、精神、構想力、悟性、知的理念等との関係を整理することによって、美的理念は経験の限界を越えようとする、概念に適合しない直観としてその全批判哲学内での所在が規定される。最後に、感性的な経験の充実を可能な限り理想的に拡張しかつ同時にその連想を一定の対象へと収束させ、作品として把握可能にするという美的理念の特殊な遂行の在り方が論じられる。(吉本浩和)

Massey, Stephen J. : Kant On Self-Respect, *Journal of History of Philosophy* 21 (1983), 57-73.

マッセイによれば、最近の道徳哲学者、法哲学者はカントの「自己尊敬 (self-respect)」を、権利の重要性を説明するのに引き合いに出す。ただ、彼らは人格が平等の基本的権利を持つと信じることを自己尊敬の必要条件とし、「奴隷状態」のカントの議論を重視する。マッセイはその必要条件に反対する。マッセイによればカントの *Achtung* は現実に道徳的な人格への感情としての *reverence* と、道徳的に行為する能力を持つ人格への義務的な *respect* に分かれる。このことに基づいて、以下の論証をする。全ての不道徳は自己尊敬の欠如に基づく。ただ自己尊敬の必要条件は、自己を単なる手段としてでなく、目的として扱うことである。そして目的として扱うことは人格としての自己が、道徳律に従って行為する能力を持っていることに基づく。その能力が人格としての自己を尊敬に価するも

のとしているのである。「奴隷状態」が自己尊敬を欠くということのカントがあげたのは、自己を目的として扱わないことの例証としてにすぎない。(安江将史)

McGoldrick, P. M. : The Metaphysical Exposition——An Analysis Of The Concept Of Space, *Kantstudien* 76 (1985), 257-275.

P. F. Strawson の“Bounds of Sense”の出版以来、カントが第一批判の「空間概念の形而上学的解明」で示した議論はトートロジーないし無意味な思考実験と評されることがあったが、論者はカントの議論を救済せんとする。前半のテーマは空間概念の概念としての特異性の究明である。それは純粹悟性概念でも経験的概念でもなく、全ての外感の基本形式をユニークに指示する“a singular concept”だと論じられる。後半のテーマは「形而上学的解明」の四つの議論の具体的に綿密な吟味である。論者はそこに、「外的対象の概念は空間概念を分析的に含む」「空間概念は対象の概念を含まない」「空間概念は単一の空間についての概念である」等のテーゼを読み取ってゆく。同時にストローソン, R. C. Walker, W. H. Walsh のカント批判が再批判されている。

「形而上学的解明」が整合的で有益な概念分析を与えていると強く、かつ実証的に論じる一編。(松田克進)

Michalson, Gordon E. : The Inscrutability Of Moral Evil In Kant, *Thomist* 51 (1987), 246-269.

『単なる理性の限界内での宗教』中の「根本悪」についての議論を追いつつ、論者は「カントにとっては道徳的悪は不可解なものではなければならなかったのだ」ということを明らかにしようとする。カントの道徳の最高原則——「汝の意志の格率が同時に普遍的立法の原理として妥当しうるように行為せよ」によれば、道徳的悪は格率が普遍的道徳法則に妥当しない場合に生じてくる。この格率選択の根拠には心術があるとカントは言う。だから心術の考察により悪は説明可能とも見える。しかしまた心術自身も1つの格率であり、格率の原因ではないともいわれ、格率選択の原因は不可知とされる。というのも何らかの原因を説明することは究破的には格率選択を行なう意志の自由を否定することになるからである。結局カント道徳哲学の中心にある「自律」の原理を貫こうとすれば、悪を不可解なものとせざるを得ず、それゆえカントが上掲書後半で展開する「善き心術の選択」・「善の勝利」の主張も説得力のないものとなっている、というのが論者の主張である。(石田あゆみ)

Ujvári, Márta : Personal Identity Reconsidered—A Comment On Aquila's Conception, *Kantstudien* 75 (1984), 328-339.

Aquila は *Kantstudien* 1979 所収の論文で、超越論的演繹における統覚の主観と観念論論駁における主観との相違を示した。彼が、後者が同一的な個人を指示するとした根拠として、個別者の在り方（時間において限定された存在）を人格の同一性の十分な基準と見なしたことを論者は問題視する。そこで論者は、人格の同一性を自我の数的同一性と区別し一種の自己認識であるとした上で、その同一性を確立する中核的な条件として自己意識と自我の直観を挙げている。論駁における主観は、外的直観の対象としては、その存続性が証明されえ、実在するものであるのに対し、統覚の主観は、外的直観の対象とはなり得ないからその存続性が主張されず、実在するものではなく、むしろ概念的なものとして考えられるべきであるとする。この点で論者は、論駁の議論が演繹の議論を完成しなければならず、繰り返してあってはならないという Aquila の主張を支持している。（竹島尚仁）

Ward, Andrew : On Kant's Second Analogy And His Reply To Hume, *Kantstudien* 77 (1986), 409-422.

この論文は、カントの「第二の類推」に関するものだが、ヒュームとの関係に關してはむしろ主題はその自我論である。ヒュームは自我の同一性を信念として説明しようとしたが、彼はこの説明に満足しなくなった。この信念の発生は結合した自我の現実的存在を前提するからである。これは自我の現実存在に關して懐疑的であろうとする彼の要求と相容れないものであった。ではカントはこのヒュームの懐疑論に答えているだろうか。カントにおいては、統一された自我の概念が生ずるのは多様な諸表象が必然的に（規則に従って）一緒に関係づけられているものとして考え得る場合のみである。しかし表象の必然的結合には、結局、与えられた多様が一つの心によって覚知されなければならないとされる。ここからカントはヒュームの懐疑に答えることに成功しているとは言えないと結論される。（黄 澈）

Weinert, F. : Ways Of Criticizing Metaphysics—Kant And Wittgenstein, *Kantstudien* 74 (1983), 412-436.

この論文は、カントとヴィトゲンシュタインの形而上学批判が必ずしも正当と言えないことを示そうとする。今カントについて見るならば、彼は分析判断と総合判断との区別を武器にして形而上学を批判している。第一に、「全ての必然的真理は恒久的真理である」という命題を、形而上学者は（カントの言い方に従えば）総合的と考えるが、カントはそれを分析的であり単なる同語反復でしかない

と批判する。しかし、「三角形の内角の和は二直角である」という命題をカントは必然的（ア・プリオリ）と考えるが、その恒久性はロバチェフスキー等により覆えられている。つまり、恒久的でない必然的命題が存在するのである。従って、先の形而上学的命題はむしろ総合的と言えよう。第二に、ライプニッツの充足理由律は分析的であって単なる論理的法則でしかないカントは批判するが、この原理は偶然的真理の神への依存性を意味しており、やはり総合的なのである。（子野日俊夫）

Zac, Sylvain : F. H. Jacobi Et Le Problème De L'Imagination Chez Kant, *Archives de Philosophie* 49 (1986), 453-482.

論者は、ヤコービのカント批判が適切か否かには疑問を抱きつつも、ともかくそれを紹介している。ヤコービによれば、カントの認識論は構想力を根本に据えて構築されており、その点では、普通には彼と対比されるヒュームと大差ない。カントは総合的認識能力の根本を統覚の総合的統一と考えるが、総合を成立させるのは実は構想力なのである。というのも、統覚はそれが一体表象なのか否か内容を持つのか否かといった点で曖昧であり、結局抽象の産物でしかないからである。確かに受容性たる感性に対しては悟性の能動性が必要であるが、それとても生産的並びに再生的構想の介在なしには機能し得ないものなのである。こうして、カント認識論は構想力のみを基盤として成り立っているのである。しかし、このことはつまり全ての表象を唯我論的に主観化することを意味し、結局カント認識論はニヒリズムに到らざるを得ないのだ、というのがヤコービの考えである。（子野日俊夫）

※ ※ ※

今回のカント文献の編集にあたって、山本精一氏（京都大学研修員）に御協力をいただいた。この場を借りてお礼申し上げる。（編集部）